参考資料１

第13回
平取ダム地域文化保全対策検討会

＜ 平成23年度 調査成果概況 ＞

2012(H24)-07-27

アイヌ文化環境保全調査室

■はじめに−① =作業の分野と課題

●調査室では、H23年度、6つの分野について調査作業を行いました。現地調査や勉強会などの際にも説明をしてきましたが、あらためて確認すると、このようになっています。★の印がついているのは、作業上、想定していた主要な目標です。

◆ 1= 精神文化保全対策に関する調査

★今日的な社会環境下において、アイヌの精神文化[illegible]の方向性を見いだす。

◆ 2= 生物の生存環境現地調査

★S-05区域を、昨年度作成した保全整備計画にしたがって主に展示目的エリアとして先行的にしっかり整備する。

◆ 3−(1)=生活文化ー川洲畑現地調査

★伝統的生活文化と自然・文化環境を調査する効果的な実験民族(民俗)学的試みとして、これまでの成果を吟味・分析し、普及活用のあり方を提示する。

◆ 3−(2)=生活文化ー伝統的漁法についての調査

★地域に根ざして育まれてきた「川の文化」の重要な構成要素である伝統漁法を再現し、今日的な条件の中で継承・活用していく基礎を固める。

◆ 4= 地域文化保全対策調査

★各分野における既往調査結果を整理、それらを活用する方策を検討し、プログラム化に取り組み、かつ可能なものについては実験的に試みる。

◆ 5= 有用植物移植試験及びモニタリング調査

★ノウハウ(技術情報)の蓄積を進め、アイヌ文化関連植物保全対策の基盤を拡充する。

●この資料つづりの末尾にとじられている「アイヌ文化環境保全調査の成果概括」(A3判の表)もご参照ください。

＜アイヌ文化保全対策調査の概要＞

2011(平成23)年度　調査基本計画

作業分野		
1	精神文化保全対策に関する調査	
2	生物の生存環境現地調査	
3	(1)	生活文化現地調査 川洲畑現地調査
	(2)	生活文化現地調査 伝統的漁法
4	地域文化保全対策調査	
5	有用植物移植試験及びモニタリング調査	

●6つの作業分野に対して、3人編成のチームを基本に取り組みました。
主担当/副担当/補佐の構成です。各人は、2つ以上の作業分野を担当。グループ制も併用するなど、柔軟に対応し、協力しながら作業を進めてきました。

■調査室運営グループ編成

グループ名	責任者及びグループ編成			
企画総括グループ	◇長野　環 <業務主任>	◇作業チーム　1／3-(2)	<相談役> ◇貝澤耕一	<学芸員・主幹> ◇吉原秀喜
情報管理グループ	◇木村真奈美 <業務主任>	◇作業チーム　3-(1)／4		<係> 菅原英敏
環境整備グループ	◇川島五月 <業務主任>	◇作業チーム　2／5		

■各作業分野担当(作業チーム)

1	精神文化保全対策に関する調査	主担当	◎村木直美	<補佐> ◇長野　環
		副担当	○貝澤輝三	
2	生物の生存環境現地調査	主担当	◎黒川賢司	◇川島五月
		副担当	○貝澤朱美	
3	生活文化現地調査; 川洲畑現地調査	主担当	◎井澤美恵子	◇木村真奈美
		副担当	○平村祐樹	
3-(2)	生活文化現地調査; 伝統的漁法についての調査	主担当	◎貝澤輝三	◇長野　環
		副担当	○黒川賢司	
4	地域文化保全対策調査	主担当	◎平村祐樹	◇木村真奈美
		副担当	○村木直美	
5	有用植物移植試験及びモニタリング調査	主担当	◎貝澤朱美	◇川島五月
		副担当	○井澤美恵子	

○現地作業アドバイス＝貝澤耕一　○データベース整備・運用＝長野　環
○コンテンツ編集＝木村真奈美　○庶務・安全管理＝川島五月　○工程管理＝貝澤朱美

■調査室職員配置

アイヌ文化情報センター内　(〒055-0101平取町二風谷61番地)アイヌ文化環境保全調査室

■今年度調査室作業テーマ ＝ 深める、高める、広める、そして力タチにする

■はじめに−② =作業上のモットー（標語・社訓）

【深める、高める、広める、そしてカタチにする】

●深める　◇アイヌ文化への理解を深める。
　　◇地域とのつながりを深める。

●高める　◇調査員としての資質を高める。
　　◇調査・研究の専門性を高める。

●広める　◇視野とネットワークを広める。
　　◇成果を地域、社会に広める。

●カタチにする
　◇蓄えた知見と技術を地域のためにカタチにする。
　◇地域・民族の願いと思いにそってカタチにする。

●【深める、高める、広める、そしてカタチにする】。これは、調査室で作業上のモットー：標語として掲げてきたコトバです。企業で言えば、社訓にあたる、作業全体のテーマです。
「カタチにする」は、昨年、23年度から付け加わりました。毎日の作業も、これらのことを強く意識しながら進めました。

■はじめに−③ =報告の順番と資料記号

■報告イ

- ◆1　精神文化保全対策に関する調査【資料A】
- ◆3−(2)　生活文化現地調査：伝統的漁法調査【資料B】

■報告ロ

- ◆2　生物の生存環境現地調査【資料C】
- ◆5　有用植物移植試験及びモニタリング調査【資料D】

■報告ハ

- ◆3−(1)　生活文化現地調査：川洲畑現地調査【資料E】
- ◆4　地域文化保全対策調査【資料F】

■補足/まと

●各分野ごとの作業内容や取り組み方を考慮して、2つの分野ごとにまとめて報告を行います。発表するのは、その分野を補佐した長野、川島木村、3人の業務主任です。報告イ／ロ／ハと呼ぶことにします。
それぞれの分野で使う資料にはA、B、C・・・の記号がついています。

■報告イ　※別途スライド資料・配布資料

◆１　精神文化保全対策に関する調査【資料Ａ】

★今日的な社会環境下において、アイヌの精神文化継承のあり方をさぐり、一定の方向性を見いだす。

◆3-(2)生活文化現地調査：伝統的漁法調査【資料Ｂ】

★地域に根ざして育まれてきた「川の文化」の重要な構成要素である伝統漁法を再現し、今日的な条件の中で継承・活用していく基礎を固める。

＜報告=長野　環＞

■報告ロ　※別途スライド資料・配布資料

◆２　生物の生存環境現地調査【資料 C】

★S-05区域を、昨年度作成した保全整備計画にしたがって主に展示目的エリアとして先行的にしっかり整備する。

◆５　有用植物移植試験及びモニタリング調査【資料 D】

★ノウハウ(技術情報)の蓄積を進め、アイヌ文化関連植物保全対策の基盤を拡充する。

＜報告=川島五月＞

■報告ハ　※別途スライド資料・配布資料

◆3-(1)生活文化現地調査：川洲畑現地調査【資料E】

★伝統的生活文化と自然･文化環境を調査する効果的な実験民族(民俗)学的試みとして、これまでの成果を吟味･分析、普及活用のあり方を提示する。

◆４　地域文化保全対策普及調査【資料F】

★各分野における既往調査結果を整理、それらを活用する方策を検討し、プログラム化に取り組み、かつ可能なものについては実験的に試みる。

＜報告=木村真奈美＞

■補足／まとめ−①

●各作業分野ごとに行った報告の補足を4点と、まとめです。
膨大な内容について、注目していただきたい点、重要だと思われる点にしぼって説明をいたしました。調査上の目的・課題などとして年度当初に計画したことがらは、概ね達成し、一部には想定以上とも言える展開、成果の部分もあった、とふりかえっています。

◆ １＝ 精神文化保全対策

★今日的な社会環境下において、アイヌの精神文化継承のあり方をさぐり、一定の方向性を見いだす。

◆ ２＝ 生物の生存環境現地調査

★S-05区域を、昨年度作成した保全整備計画にしたがって主に展示目的エリアとして先行的にしっかり整備する。

◆ ３－(1)＝生活文化ー川洲畑現地調査

★伝統的生活文化と自然・文化環境を調査する効果的な実験民族(民俗)学的試みとして、これまでの成果を吟味・分析し、普及活用のあり方を提示する。

◆ ３－(2)＝生活文化ー伝統的漁法についての調査

★地域に根ざして育まれてきた「川の文化」の重要な構成要素である伝統漁法を再現し、今日的な条件の中で継承・活用していく基礎を固める。

◆ ４＝ 地域文化保全対策調査

★各分野における既往調査結果を整理、それらを活用する方策を検討し、プログラム化に取り組み、かつ可能なものについては実験的に試みる。

◆ ５＝ 有用植物移植試験及びモニタリング調査

★ノウハウ(技術情報)の蓄積を進め、アイヌ文化関連植物保全対策の基盤を拡充する。

■補足/まとめ-② =作業モットー（標

【深める、高める、広める、そして

●深める　◇アイヌ文化への理解

◇地域とのつながりを

●高める　◇調査員としての資質

◇調査・研究の専門性

●広める　◇視野とネットワーク

◇成果を地域、社会に

●カタチにする

◇蓄えた知見と技術を地域のためにカタチにする。

◇地域・民族の願いと思いにそってカタチにする。

●最初の方で、ご説明しました【深める、高める、広める、そしてカタチにする】という、作業上のモットー：標語ですが、これに照らしながらのふりかえり、総括も行っています。この点についても、一定の進展、成果があり、それにともなう調査室スタッフの習熟、成長もあったのではないか、と考えています。

たとえば、「カタチ」にするという点について、地域・民族、コミュニティとの「つながり」、「きづな」に強く留意しながら、さまざまな協働（=コラボレーション）を進めてきました。こうした動きは、この事業全体の成果をさらに定着させ、広めていく上で、手がかり・足がかりとなる基盤を形成していくものと理解しており、共通認識としたい点です。

■補足/まとめ-③

=コミュニティ（地域・民族）の歩みの中で【時間軸：歴史的位置】

▼1970年代　民族の歴史・文化に対する再認識

〈例〉　二風谷アイヌ文化資料館の開館

▼1980年代　「伝統を守り、未来に受け継ぐ」

〈例〉　アイヌ古式舞踊の国重要民俗文化財指定

▼1990年代　「アイヌ伝統文化の今日的継承」

〈例〉　平取町立二風谷アイヌ文化博物館の開館

▼2000年代　「アイヌの人たちをはじめとする地域住民の主体的参画と専門家との協働」

〈例〉　アイヌ文化環境保全調査、イオル整備事業の開始

▼2010年代　「アイヌ文化継承・振興の展開と深化」

〈例〉　平取町アイヌ文化振興基本計画の策定

※沙流川流域アイヌ文化の調査・研究・実践的諸活動は、アイヌ民族・文化をめぐる歴史の各時期に、一つの「スタンダード」を提示してきた。

●補足/まとめ－②で、地域・民族、コミュニティとの「つながり」、「きづな」に留意しながら、コラボ、協働を進めたと強調しました。その延長で、ここではさらに、そうした地域・民族の歩みの中で、10年目を迎えるこの事業が、どのような歴史的位置にあるのかについて、試論を提示します。時間軸にそって、総括を深めるための論議の素材となれば、と考えます。

◆平取町のイオル構想提言書『IWOR2002』より

extract; Biratori town IWOR plan proposal《IWOR2002》

●21世紀に入って最初の10年間に着手された重要なプロジェクトの典型・代表例の一つに、イオル(伝統的生活空間)整備事業があります。これも「アイヌの人たちをはじめとする地域住民の主体的参画」と「文化環境」を重視しているという点で、志向性を共有している取り組みです。

◆『平取町アイヌ文化振興基本計画』（平取町：平成22年3月）より

●「アイヌ文化継承・振興の(さらなる)展開と深化」を2010年代の特徴であり、目標でもあると仮に掲げました。平取町における「アイヌ文化振興基本計画」の策定は、それを象徴し、画期となる動きだと言えます。たんに希望・願望を描き、まとめたのではなく、現に取り組まれ、基盤も実績も蓄積されてきた事業・活動を踏まえて将来を展望した計画です。その中で、主要プロジェクトの一つに位置づいて、この事業は進められています。

■平取町アイヌ文化振興基本計画の位置づけ

上位計画

第５次　平取
（平成 18～

アイヌ文化を取り巻く情勢を反映

平取町のアイヌ文化振興上の課題

平取町のアイヌ文化振興の施策を推進する基本的方向性を示す

平取町アイヌ文化振興基本計画

基本的方向性に基づき、アイヌ文化振興に関わる各種事業の情報交換・共有を進め、効果的に事業を進める。

- イオル再生事業
- 文化的景観事業（アイヌ文化関連）
- 平取ダム地域文化調査業務
- 教育委員会の既存の事業等
- アイヌ協会平取支部の既存事業
- 萱野茂アイヌ資料館の事業

平取町アイヌ文化振興基本計画により、各施策の連携を図り、効果的に進めます

■補足/まとめ−④

=事業開始の背景、その現況との関わり【空間軸：社会的位置】

①河川法の改正（住民意見、環境を重視）

⇒⇒⇒　2009(平成21)年11月　治水有識者会議設置

②アイヌ文化振興法の制定・施行

⇒⇒⇒　2009(平成21)年7月　アイヌ政策有識者懇談会報告

③二風谷ダム裁判判決（札幌地裁で終審、確定）

⇒⇒⇒　2008(平成20)年6月　アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議、衆・参両院において採択／官房長官談話（同日）

◆1997（平成9）年⇒　新しい画期？2009（平成21

※*常本照樹2011『アイヌ民族と教育政策』(札幌*

とくにく補論:「日本型」先住民族政策の可能

【参考：事業の時期区分（試論）】

第Ⅰ期　2003(平成15)年4月～06(平成18年)3月

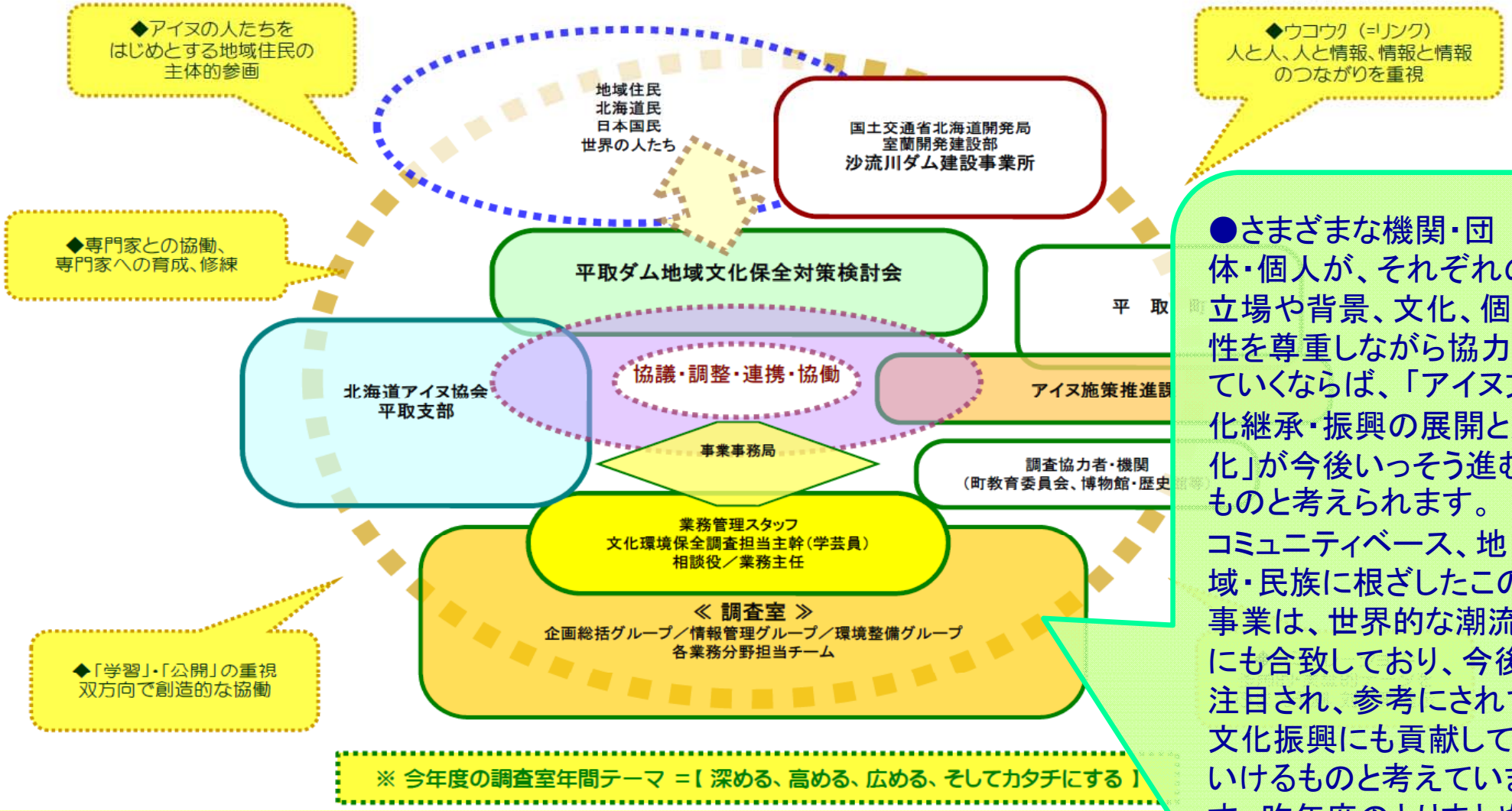
第Ⅱ期　2006(平成18)年4月～　保全対策を志向し

（2009(平成21年)10月～　調整期？）

※*治水有識者会議によるダム事業検証⇒ 平成*

●補足/まとめ－③では、時間軸にそって事業の歴史的位置について了解しようとしました。続いて、この④では、空間軸、つながり・広がりを意識しながら、事業の社会的位置について、状況の変化をふまえながらの検討を促したいと思います。2002(平成14)年に準備が始まり、03年(平成15）年より開始されたこの事業のスタート時、調査委員会の趣意書などで、三つの「背景」とされた事項を念頭に、社会政治環境の変化との関わりを整理してみましょう。この事業は、とても重要な位置にあると言えそうです。

■アイヌ文化環境保全対策事業の体制概念図　（平成23年度）



●さまざまな機関・団体・個人が、それぞれの立場や背景、文化、個性を尊重しながら協力していくならば、「アイヌ文化継承・振興の展開と深化」が今後いっそう進むものと考えられます。コミュニティベース、地域・民族に根ざしたこの事業は、世界的な潮流にも合致しており、今後注目され、参考にされて、文化振興にも貢献していけるものと考えています。昨年度のとりまとめを通じて、そうした可能性を実感しています。

※自分（たち）はどこに位置し（固定的とは限らない）、誰と共に、何を目ざし、どこを、

kanto orwa yakusakno arankep sinep ka isam

＜天から役割なしに降ろされたものは一つもない＞

謝　辞

☆ 検討委員の方々、北海道開発局、平取町をはじめ、関係の皆様に
☆ 地域でアイヌ文化継承・振興の取り組みを共にしているすべての方々に

●昨年度の成果について、調査スタッフや関係の方々との協議をふまえて、以上のように概括しており、簡略ですが、成果報告といたします。多くのご指導、ご協力、ご支援を誠にありがとうございました。

＜ アイヌ文化環境保全調査業務の成果概括 ＞　2011(平成23)年度

作業分野	目的／課題	業務項目と想定成果（目標とする状況・物品）	Ａ◆成果の概況、Ｂ◆その特徴、Ｃ◆意義・課題
■１ 精神文化保全対策に関する調査	◆精神文化の保全対策に必要な現地調査を実施する。また、調査内容について、地域の関係者の意向を確認し、整理する。	①【現地調査】各保全対策の検討のために必要な精神文化に係る現地調査を実施する。⇒　*ａ：対象地のより詳細な現況図・写真　ｂ：保全対策の提案書、設計概念を提示する図書・工程表・関連データ* ②【意向調査】各保全対策について調査方針及び結果について、地域の関係者の意向を確認する。⇒ *ヒアリング（個別・グループ）実施と結果集約・分析* ③【調査結果とりまとめ】精神文化保全対策の観点から、これまでの調査結果を整理し、今後必要となる調査を抽出する。⇒　*報告文・図版* ★今日的な社会環境下において、アイヌの精神文化継承のあり方をさぐり、一定の方向性を見いだす。	Ａ◆現地調査等により精神文化の所産に関してこれまで蓄積した情報を補充しつつ、アイヌ協会平取支部関係者・有識者から主としてヒアリングにより意向把握を行った。緊要な問題、可能な事項については実現に向けて対処しながら、今後において具現化を図るべき課題を整理した。 Ｂ◆工事等の進展により生起した問題に即応し、当事者性の強い関係者の意向・意志確認を先行しつつ調整・促進の役割をになった。とくに儀礼的行為について、円滑な実施を図るべく準備の作業を支援し、「試行」の機会ともした。また、今後の精神文化保全対策に活かすために、一連の協議や「試行」過程を記録し、必要に応じて提供できる備えをした。 Ｃ◆「今日的な社会環境下において、アイヌの精神文化継承のあり方をさぐり、一定の方向性を見いだす」とした想定目標に向け、足がかりを築けた。開発事業に伴って行う精神文化保全に関するこのような試みは、従来の諸活動には例がほとんどなく、貴重な先行例となり得る。
■２ 生物の生存環境 現地調査	◆優先度の高い植生モデル区域Ｓ－０５の整備計画案に基づき移植等を実施し、活着等の生育状況を確認するとともに、必要に応じて配置の再検討を行う。	①【移植試験実施】植生保全区域３５区域について、モデル区域Ｓ－０５の整備計画案に基づき移植を実施する。⇒　*H22年度に作成した整備計画において中心となるＳ－０５区域で予定している植物種の移植* ②【移植状況検討】モデル区域Ｓ－０５の整備後、活着等の生育状況を確認、必要に応じて配置の再検討等を行う。⇒　*業務分野５との連携でモニタリングを実施し生育状況を管理* ③【調査結果とりまとめ】調査結果をとりまとめる。モデル区域Ｓ－０５の次年度以降の植栽計画について、精査を行う。⇒　*とりまとめの報告文・図版（整備計画の改訂）* ★Ｓ-05区域を、昨年度作成した保全整備計画にしたがって主に展示目的エリアとして先行的にしっかり整備する。	Ａ◆昨年度作成したＳ－05区域を中心とした《植物保全整備計画》にしたがって木本(16種約200本)・草本(19種5区画)の移植などの作業を進めた。その後、モニタリングを行っているが、活着状況は概ね良好である。今年度の作業状況等をふまえて《計画》のバージョンアップも行った。 Ｂ◆植物保全の二つの方向性、「主として展示を目的」・「主として増殖を目的」の内、前者に重きをおいた《計画》である。「人間の一生と植物の関わり」を全体の軸にしつつ、儀礼・食用・薬用などのテーマを組み合わせた展示シナリオとなっている。植物観察ツアーのガイドなど、普及の場としての整備を意識した試みにも取り組み、好評を博した。 Ｃ◆地域住民が主体となった植物分布と伝統的利用に関する調査を基礎に、住民自身が専門家との協働のもとに保全計画を作成し着手、実行段階にいたっているという点で先行例があまりなく、先駆的・画期的である。
■３－(1) 生活文化現地調査 ；川洲畑現地調査	◆アイヌ文化期にかつて行われていた栽培方式(川洲畑)について、栽培様式を伝承する際の基礎資料とするため、試験適地を選定し栽培試験を行う。試験結果に基づき生育状況を把握し、データを蓄積するとともに、収穫物を利用したアイヌ文化期の食事等、当時の生活様式の再現を行う。また、既存の調査結果を基に、川洲畑栽培マニュアル(案)とりまとめる。	①【現地調査】現地調査選定箇所の事前準備及び栽培試験を行う。⇒　*調査を踏まえた実施詳細計画・工程表、プロセスの記録* ②【モニタリング】川洲畑現地調査状況把握のためのモニタリングを行う。⇒　*モニタリング経過のデータと分析* ③【食文化再現調査】調査結果を基に、実際にアイヌ文化期の食事についての再現（調理）を行う。⇒　食文化の再現（試食会開催、レシピ作成・公開） ④【調査結果とりまとめ】調査結果をとりまとめる。これまでの調査結果を基に川洲畑調査マニュアル(案)を作成する。⇒報告文・図版、マニュアル(案)作成 ★伝統的生活文化と過去の自然・文化環境を調査する一つの効果的な民族(民俗)学的実験として、これまでの成果を吟味・分析し、普及活用のあり方を提示する。	Ａ◆伝統農法の一つ川洲畑について、２カ所の試験地（＋１カ所の栽培試験畑）を設け試行した。過去4年間の取り組みの蓄積に加え、この農法継承の基礎資料を拡充して、それらを踏まえた「まとめ(マニュアル案)」を形にした。食文化については、レシピ集を集成した。 Ｂ◆栽培法の試験という目的に加え、次の２点をこの分野の取り組みを特徴づけるものとして重視。①協力者の知見・体験を文献などによる情報と関連づけ、往時の生活文化や自然環境と、その変遷を把握する作業にも並行して取り組み、図や年表などによりその成果を示した。②これらの作業は多くの局面で、若い世代が実践的・体感的に伝統文化を継承するプロセスともなる。 Ｃ◆上記の特徴を踏まえ、マニュアル案をはじめ成果のまとめは、「伝統的生活文化と過去の自然・文化環境を調査する一つの効果的な民族(民俗)学的実験として、これまでの成果を吟味・分析し、普及活用のあり方を提示する」ことに留意し作成した。活用と継続的充実を図りたい。
■３－(2) 生活文化現地調査 ；伝統的漁法についての調査	◆アイヌ文化期にかつて行われていた伝統的漁法について、伝統的漁法を伝承する際の基礎資料とするために、既存の調査結果を踏まえ、漁具や漁法を再現するとともに、試験の実施、データの蓄積を行い、試験結果をとりまとめる。	①【試験地事前整備】これまで実証できていない漁具について、漁法検証試験の実施効率を上げるため、適地の選定、漁具の作製、周辺整備を実施するとともに、関係機関への協議資料等の作成を行う。⇒　*試験地絞り込みと周辺環境の点検・整備、諸手続書類と手引き（マニュアル）* ②【実証試験】これまで実証できていない漁具について、伝統的漁法現地調査・モニタリングを行う。⇒　*漁具作製、その素材・作製技法・使用法・伴う儀礼等の調査／記録の保存・分析（モニタリング）とマニュアル化* ③【食文化再現調査】調査結果を基に、実際にアイヌ文化期の食事について再現（調理）を行う。⇒ *食文化の再現（試食会開催、レシピ作成・公開）* ④【調査結果取りまとめ】調査結果をとりまとめる。実証できない漁具については、課題の抽出、調査の提案を行う。⇒　*報告文・図版* ★地域に根ざして育まれてきた“川の文化”の重要な構成要素である伝統漁法を再現し、今日的な条件の中で継承・活用していく基礎を固める。	Ａ◆昨年度の特別採捕の取り組みを踏まえ、サケ漁をはじめ伝統漁法を実施するための諸手続や現地環境整備等に、関係者・機関の協力をいただき、試行を継続できた。川漁の道具・方法に直接関わることだけでなく、行政的対応のノウハウもふくめた基礎資料がさらに整い、伝統文化継承のための採捕の定着と展開が期待できる状況になった。 Ｂ◆地域外に向けたイベントではなく、生活に根ざした家族・小集落単位による古来の営為という想定で試行したが、そのようなこだわりゆえに得られたと思われる知見・体験も多く、伝統文化を深く探求する上で有意義な取り組みとなった。 Ｃ◆当面の目標である「地域に根ざして育まれてきた“川の文化”の重要な構成要素である伝統漁法を再現し、今日的な条件の中で継承・活用していく基礎を固める」ための取り組みが軌道に乗りつつあると評価できる。こうした動きを発展的に継続していくことが第一義的な課題。
■４ 地域文化保全対策 調査	◆既存の調査結果を整理し、地域文化保全対策として継承できる方策として資料を作成する。また、資料を用いて関係機関・施設を対象に試行調査を実施し、収集した意見・感想等を踏まえた資料の修正及び調査結果のとりまとめを行う。	①【保全対策試行調査】既往の調査結果を基に、保全対策実施に向けた試行調査を行う。⇒　*試行と結果分析（シミュレーション的試行をふくむ）* ②【意向調査】試行調査実施後、調査協力者から意見・感想等を収集し整理する。⇒　*意見・感想等の集約と分析。* ③【地域文化保全対策プログラム作成】既往の調査結果、特に各分野でとりまとめたデータベースを基に、地域文化保全対策方策として活用できるプログラム等を作成する。⇒　*プログラム・資料の作成* ④【調査結果とりまとめ】調査結果をとりまとめ、地域文化保全対策のための基礎資料を整理する。⇒　*ａ：映像コンテンツ作成と活用例提示／ｂ：報告文・図版* ★各分野における既往調査結果を整理、それらを活用する方策を検討し、プログラム化に取り組み、かつ可能なものについては実験的に試みる。	Ａ◆従来、主に貫気別中学校における社会科の授業を主軸に取り組んで来たが、今年度もこれを継承して内容を深めることができた。これに加えて、アイヌ協会平取支部（とくに青年部）、平取アイヌ文化保存会、二風谷観光振興組合といった地域団体、あるいはＮＰＯ、企業、大学(とくに北海道大学アイヌ・先住民研究センター)との協力により、多様な普及・活用事業を試行することができた。シシリムカ文化大学(学長=川上満町長)の運営にもスタッフ全員で協力した。 Ｂ◆①多彩な組み合わせ・方法の協働(コラボ)により進めている、②スタッフが自分たちの調査成果を活かし、多様なプログラムを工夫・開発しながら進めている、という特徴がある。また、事前・事後の協議、感想・意向の把握などを丁寧に行い、効果を高めるよう努めた。 Ｃ◆学校教育を含め、アイヌ文化普及・啓発の実践で、調査等による独自・最新の知見を活かしながら(文化継承＆調査保全の)担い手自らが行う効果的スタイルを新たに確立しつつある。
■５ 有用植物移植試験及び モニタリング調査	◆これまでの調査結果・計画に基づき、有用植物の移植試験及び播種栽培試験を実施する。試験結果を踏まえ、有用植物の種ごとの移植マニュアル(案)・植物栽培マニュアル(案)の更新を行う。また、移植及び播種の状況（既に実施している有用植物含む）を確認するために、モニタリング調査及び試験地の整備作業を行うとともに、次年度以降のモニタリング計画(案)をとりまとめる。なお、試験実施する種につていは、調査職員と協議の上決定する。	①【移植試験事前準備】移植試験実施に必要となる事前準備（現地確認等）を実施⇒　*移植試験地絞り込み周辺環境の点検・整備* ②【移植試験地整備作業】活着率を上げるため、移植箇所付近の除草、食害防止を実施⇒　*移植試験地の点検・整備* ③【移植試験（木本／草本）】主としてこれまで実施されていない木本／草本を対象として、移植栽培試験を行う。⇒　*移植試験（未実施種中心）過程記録* ④【移植マニュアル(案)の整備】移植試験を実施した植物について、移植栽培マニュアル(案)の更新を行う。⇒　*移植試験結果分析、マニュアルの改訂(version up)* ⑤【播種栽培試験事前準備】播種栽培試験に必要な事前準備を行う。⇒　*播種試験地絞り込み周辺環境の点検・整備* ⑥【播種栽培試験】木本／草本の播種栽培試験を行う。⇒　*播種試験結果分析、マニュアルの改訂* ⑦【播種栽培マニュアル(案)の整備】播種栽培試験を実施した植物について、播種栽培マニュアル(案)の更新を行う。⇒　*播種試験（未実施種中心）過程記録* ⑧【試験結果とりまとめ】移植試験実施植物を対象としたモニタリングとモニタリング計画(案)をとりまとめる。⇒　*報告文・図版* ★ノウハウ(技術情報)の蓄積を進め、アイヌ文化関連植物保全対策の基盤を拡充する。	Ａ◆アイヌ伝統文化の観点から有用性が高い植物について、種ごとの、あるいは育成方法別のマニュアルを作成し、試行・モニタリングを重ねながら、その充実に努めた(更新版を作成)。また、試験地の整備も引き続き行い、今後に向けて保全対策の基盤拡充を図った。 Ｂ◆マニュアルはさまざまな試行錯誤を経て内容が充実しつつあり、利用目的に応じて編集をしたパンフレットなど、多様な形態での情報提供、成果活用が可能となりつつある。 Ｃ◆アイヌ伝統文化の観点から有用性が高い植物の「育成」については、系統性・継続性をもった包括的な取り組みの事例が他にほとんどない。そうした状況のもと、地域住民であり、文化継承の担い手でもある人たちが自ら調査と試行を重ね、それを踏まえ、何よりも今後の自分たち自身の作業にとって手引きとなり、関連事業の従事者にとって参考となるマニュアルなどが形になりつつあることの意義は大きく、さらに充実を図りたい。 【調査作業全体として】作業上のモットー、標語として、＜深まる、高める、広める、そしてカタチにする＞を掲げて取り組み、一定の成果をあげることができた。今後は、カントｵﾛﾜ　ヤクサｸﾉ　アランケﾌﾟ　シネﾌﾟカ　イサﾑ＝天から役割なしに降ろされたものは一つもない、といった格言にあらわされる精神文化についてさらに理解を深め、感得しながら作業に臨みたい。